文窓

ふみのまど

神戸大学文学部同窓会誌

発行
平成15年10月25日
創刊号
神戸大学文学部同窓会
会長：広瀬　豊英
事務局
〒657-8501
神戸市灘区六甲台町1-1
TEL (078) 881-1212(代)
FAX (078) 803-5529

同窓会の怪と解

文学部同窓会会長 9回生　広瀬　豊英

最初に個人的な述懐で恐縮だが、柄でもない自分が会長になり、多士済済の先達・同輩・後進に対してリーダーとしてその責を負えるのかという怪。つぎに同窓会はどのようにあるべきかという、いわば公的な怪。

個人的なことはさておき、神大文学部同窓会のこれからのあり方を提起し、ご挨拶にかえさせてもらう。

神大の各学部の八つの同窓会は学部の性質や歴史的背景などが当然のごとく異なりスタンスはちがっている。それぞれが歴史的所産を引き継ぎながらまた時代の要請を負っている。そこで現代における要請とは何であろうか。それは母体たる大学の法人化を来年四月に控えてその渦中にあることである。なおかつその渦は潮の干満によって消長があるわけでなく、将来ますます大きくなることが予想されきびしい「経営」を強いられることが必定といえる。サバイバル戦の大競争時代に入ったわけで、むかしの象牙の塔は修羅場にならんとしている。そこで同窓会も学部に対して緊密な連携をはかりおたがいにバックアップをすることが要請されている。

しかし、そもそも同窓会は親睦をベースにした任意団体から出てきたものだ。袖触れ合うも多生の縁とやら同窓のよしみを奇貨としむかしの武勇伝やロマンスをサカナにしての酒宴、講演会や講習会、ゴルフのコンペや囲碁大会なども考えられているのもけっこうなものだ。そうならば修羅場は桃源郷にもかえられる。

三人寄れば文殊の智恵といわれる。ところがこの同窓会は五千人の俊秀を擁している。賢兄や才女がこぞって寄って下さればどれほどの智恵が授かるか、想像もつかない。神大文学部や同窓会が時により変幻自在に象牙の塔であり修羅場であり桃源郷になり得る。わたしの怪としたことが杞憂に帰し、そこにすべて解があると確信し、諸賢のご指導とご鞭撻をひらに希い願うしだいである。

国立大学も大きく変動しています

文学部長・文化学研究科長　岩崎　信彦

「岩崎先生が、学部長？」と驚かれた卒業生もおられるのではないでしょうか。私も自分のことながら、驚いています。時のたつのは本当に早いものです。ごあいさつが遅れましたが、同窓生のみなさま、いかがお過ごしでしょうか。お元気のことと存じます。

近年は、国際情勢も不穏、国内の景気も回復が遅く、気候もいささか不順です。21世紀がこのように進み始めるとは夢にも思っておりませんでした。近代という時代の総決算が始まっているのでしょうか。

国立大学も大きく変動しています。2004年4月から国立大学は「法人化」します。大学リストラが始まるのです。まず、国が国立大学の教育研究に「責任を持つ」ということがなくなります。大学の自己経営責任です。教職員も公務員ではなくなります。大学予算は国が引きつづき出しますが、その代わり、大学の教育、研究、社会貢献について国の責任で「評価」を行い予算配分に反映させることになります。各学部は外部資金の獲得量を増やしていくように指導されています。「合理化」と「評価主義」が強まり、それを通じた「国家管理」もできる仕組みなのです。

文学部は本来こんなことに縁遠いところです。しかし、決まった以上それなりの、というより自分たちが納得できる改革努力をしなければなりません。学生による授業評価を導入し、就職指導を充実しようとしています。大学院に「倫理創成」講座を新設し、また、地域社会の市民団体や自治体と連携して「地域の歴史文化遺産の保全事業」を進めています。教員は多忙に負けず、良い研究成果をあげるよう努力しています。

こういう厳しい状況のなかで、文学部にとってこれから一番頼りになるのは同窓生のみなさまです。社会の各分野でご活躍されている経験にもとづいて、その知恵と力によって文学部の学生と教員をご支援ください。私たちも、新しい時代の新しい文学部を創るために奮闘していく所存です。

発刊に寄せて

前会長　5回生　沖野　政弘

本年３月をもって私は24年間にわたる文学部同窓会の大役から解放された。思い出せば、杉之原先生から岩崎先生にまで至る、なんと12名の文学部長との交わりをいただいたことになる。その間に哲学と美学の当時現役の先生方の受難の時代もあり、私の学生時代の恩師もほとんど故人となられ、親しくしていただいた先輩と友人も失った。光陰矢の如しであった。しかし私は、何事もスローテンポで専門の研究と人間形成もまだ方向と地平が見定められないような性格なので、人が一年で仕上げることを十年くらいを要する質である。世間では持続は力なりとか言われるが、同窓会における24年間にも及ぶマンネリ化はよくなかったし、大体非常識でもあった。なぜこのような事態になってしまったのか。要するにそれは、右のような私のスローテンポの性格と、加えてわれわれ五回生に有能で適切な後輩を見出す能力と意欲が欠けていたことに尽きる。さらに私は、本年３月で本務校勤務40年を迎えたのであるが、その前半15年間は子供たちと遊ぶことに熱中しての少年野球活動、後半が大体同窓会活動ということで、一番大事な研究活動をかなり手抜きしてきた。これからは、この40年という数学的に計算できるクロノス的時間を、感謝と賜物としてのカイロス的時間へと止揚し収斂していくことを研究活動の指針にしていきたい。そうすれば、24年間のマンネリ化した同窓会活動のクロノス的時間も、いずれ感謝と恵みの時へと変容されていくことであろう。

最後に九回生を中心とした新役員の皆様には、限界にきていたわれわれ五回生の窮状を助けていただいたことに心より感謝し、文学部の研究・教育の発展のために御協力下さることをお願い申し上げたい。

老いてみて

9回生　安部　栄治

この度、ひょんなことから同窓会のお世話を手伝わせてもらうことになった。卒業以来の職場を定年退職して早や5年になる。少し暇もでき、お役に立てればと思っているのだが、心配ごともある。同窓会は利害得失や強い目的意識でつながった組織ではなく、青春時代のなつかしさなど細ぼそとした感情で維持されている基本的に弱い組織である。それだけに会員の対応も千差万別である。ちょっと大げさになるが、このような同窓会を、所属することに誇りを感じ、共に行動することによろこびや生きがいを得るような楽しい組織にしていくには、世話役は何よりも忍耐と寛容が必要になると思う。いろいろな意見や要望を受け入れるとともに、納得してもらえるように根気強く説明もしなければならない。

人間は誰でも歳をとると性格は穏やかになり腹のたつことは少なくなるものと思っていた。しかし、老いてみて、いや老いるにつれ腹立たしく感じることが多いのは何故だろう。青年期、壮年期の環境のせいかもしれないが、困ったものである。

電車の中の女子高生のマナー、居酒屋での店員の緩慢な対応、本当にひどい駐車を取締らない警察、外国人の犯罪増加、麻原、宅間被告の弁護、デフレ下で値上げするブランド、アフガン、イラク、北朝鮮への政府の姿勢、抵抗勢力と言われる政治家の態度、ひいては今年の夏の天気、などなど腹の立つことばかりだ。

老いても一向に心静まることのない小生が何よりも忍耐と寛容が望まれる同窓会の世話役を努めることができるかどうか、心配でならない。

会員皆様の忍耐と寛容に期待し、ひたすらご指導、ご支援を願う次第である。

「多神教的日本」は「文明の衝突」の調停者になりうるか？

東洋史学専修 教授　濱田　正美

（以下は本年4月3日に行われた神戸大学クラブの例会での講演を記憶に基づいて再構成したものである。）

日本経済の調子が良かったころから、「人間中心主義のヨーロッパ文明は既に行き詰まった。自然との共生の上に立つ日本の文明こそがこの行き詰まりから脱却する道を示すことが出来る」という類の説が勇ましく主張されるようになりました。経済状況が悪化した後でも、9・11のテロに続きアフガニスタン、イラクでの戦争によって、ハンティントンの『文明の衝突』が現実化したかに見える状況の下で、「一元論もしくは一神教に基づく一方的な世界観がこの衝突の原因であり、多元的（多神教的）な日本文明は、その固有の価値を世界に知らしめることにより、衝突の調停者の役割を果たせるはずである」といった言説をときに見かけることがあります。ハンティトンの「衝突説」の是非についても検討を加えねばなりませんが、ここでは果たして日本文明に「調停者」の資格有りや無しやという問題についてお話を申し上げたいと存じます。

梅原猛氏などによりますと、日本文化（もしくは文明）に固有の特質は、縄文時代以来一貫して、万物のうちに人間と同じ霊魂の存在を平等に認めるアニミズムだそうであります。こうした話は分かり易くはありますが、これを証明することはほとんど不可能のように思います。日本人は、一木一草に「カミ」が宿ることを確信して来たと言われても、例えば、「御神木」として崇拝される特定の樹木の存在は、「カミ」が万物に平等に存在するのではないと考えられたことの明らかな証拠だと反論することも出来ましょう。なるほど、アニミズムは人類の最初の「宗教思想」でありますが、特殊日本列島においてのみそれが固有のものとして存在し続けたという主張には、根拠を認めることは出来ません。また確かに、日本に移入された仏教が、アニミズムと親和的であったとの説にはある程度の妥当性を認めることが出来ます。しかし、日本に入ってきたほぼ最初の仏教哲学である法相唯識論（有名な玄奘三蔵がインドからもたらし、その弟子の世代にほぼ同時的に日本に紹介されました）では、「五性格別」といって、人間の中にはどのようにしても悟りに到達することが出来ない者があるとされておりました。少なくとも奈良時代の仏教は、人は誰でも成仏できるとは説いていませんでした。これに対し、最澄は、唐における新たな思潮である天台をもたらします。こちらは、法相宗を批判して、「悉有仏性」すなわち一切の存在は仏性を持つとの説を唱えました。一方、空海は密教の理論に「不二」（男女、生死のような二項対立に見えるものも本来は、不二・一体である）「本覚」（万物に本来備わる悟り）の思想を取り込み、やがてこれが叡山の天台宗に移入されて、日本仏教の中心的な教理になります。生死不二、凡仏不二（凡夫と仏は本来同じ）と言うようにすべての対立の存在を否定するこの思想は、一方では道元の悉有仏性（道元はこの言葉を、悉有ハ仏性ナリ、と読んでいます。つまり存在一切がそのまま仏だということです）、親鸞の悪人正機へと繋がります。また一方ではことに鎌倉中期以降、和歌・能楽・生け花・茶の湯、そして後の俳諧にいたるまで、様々な文芸に理論的な根拠を提供するようになります。法華教の読誦の功徳によって、芭蕉の木の精が成仏するという筋立ての能『芭蕉』などを見ると、草木国土悉皆成仏道という思想を媒介にして生み出された芸術のすばらしさを感得することが出来ます。しかし、この一切の対立相を否定するという思想が易きに流れれば、すなわち道元や親鸞に見られる自己に対する厳しさを欠くならば、自己と現実の全面的かつ無限の肯定を結果してしまうでありましょう。私は、ある文明に固有の特質などといったものの存在を出来れば認めたくないとは考えておりますが、この対立相の否定、徹底的な現実肯定という問題に

関してだけは、中世以来のある種の連続を認めざるを得ません。

ところで、「文明の衝突」に際しての日本の「調停者」としての役割を説く人々の頭にあるのは、この「不二」思想ではないかと思われます。対立しているように見えるものも本質は同じなのだから対立は止めなさいと言うことになるのでしょう。果たして、この言い分が、「衝突」の当事者たちに理解されるかどうか、特にイスラームの教義との対比で考えてみたいと思います。

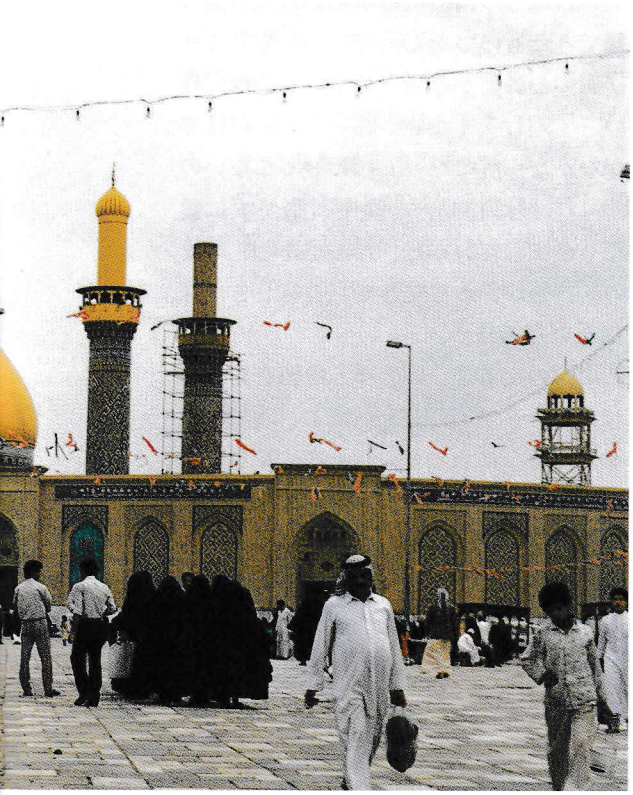
一神教は長い時間の経過を経て出現したもので、一神教が砂漠の宗教であるという和辻哲郎の説は全くの空想です。古代のオリエント、つまりメソポタミアの宗教は多神教でした。人々はあらゆる現象、太陽が昇ったり、風が吹いたり、麦が実ったり、ビールが発酵したりすることの背後にそれぞれ一柱の神の働きを認めました。従って、早い段階では千を越す神々の存在が文献から知られます。やがて、有力な神々は他の「小さな神」の機能を取り込み、パンテオンの神々の数は減少してゆきます。そして、複数の神が存在することは認めた上で、そのうちのただひとつの神のみを崇拝するエノテイスム（唯一神教）の段階に到達し（旧約聖書にはこの段階を示している部分があります）その後に、本当の意味での一神教、つまり唯一の神以外の神の存在をそもそも認めない宗教が出現します。ユダヤ教・キリスト教、そしてイスラームは、神は唯一で永遠であり、その神が人間を含むこの世界を創造したという観念を共有します。

余談になるかも知れませんが、創造について一寸考えておきたいと思います。世界中に広く存在する神話を見ると、主なタイプとして神々が世界を作り出すものと産み出すもののふたつがあるように考えられます。（私は神話学者ではないので間違っているかも知れません。）イザナギ・イザナミの二神が男女の交わりによって国と神々を産むという日本の神話は、典型的な産み出すタイプです。これに対し古代のメソポタミアの神話は、知られる限りでは、作り出すタイプに属します。例えば、人間の創造についてある神話の伝えるところはこうです。人間の創造以前、神々だけが存在していたとき、既に神々の間に「階級差」があって、下級の神々は上級の神々が安楽な生活を送れるように労働に従っていた。ところが下級の神々はこれを不満としてストライキに突入し、上級の神々は苦境に立たされた。そこで、ひとりの賢い神が、決して文句を言うことな

く神々にひたすら奉仕する存在を作れば良いことに気がついて、ひとりの下級の神を殺し、その血と粘土を混ぜて人間を作った。梅原猛氏は、どこかでこの神話に言及して、西洋文明はその起源において労働を蔑視していたと述べておられましたが、この解釈は誤解です。この神話で述べられていることは、神の満足のためにひたすら労働をすることが人間に定められた運命だということですから、労働の蔑視

ではけっしてありません。

神への絶対服従という観念は、一神教の段階になるといよいよ強調されるようになり、イスラームにおいて頂点に達したと言うことも可能です。そもそもイスラームとは「絶対服従」を意味するアラビア語です。唯一の神以外のものを神に等しく崇拝すること、言い換えると神の唯一絶対性を否定すること、つまりは多神教、これをアラビア語ではシルクといい、シルクを行う人間をムシュリクといいます



シーア派イマームの廟

が、ムシュリク、つまり多神教徒は神に対する罪人ということになります。『コーラン』には「神聖月が明けたなら、多神教徒は見つけ次第、殺してしまうがよい」と言う章句が含まれておりますが、後世の歴史書などでは、この文章の前段を省いた部分だけが盛んに引用されるようになりました。イスラームは自らの庇護を受け入れた（言い換えると税金を払うことに同意した）啓典の民であるユダヤ教徒とキリスト教徒に対しては共存を認めますが、多神教徒は存在すら認められません。ただしこれは理屈の上のことであって、実際にはイスラーム教徒とヒンドゥー教徒がある程度平和的に共存していたインドのような例も見られます。しかし、「原理主義者」のうちには、この理屈をそのまま実践することを目指す人々も存在することも指摘せねばなりません。

不二や本覚の思想をイスラーム教徒に理解してもらうことは可能でしょうか。イスラームには、正統教義と並行して、もしくはこれと融け合って、神秘主義的思潮が存在し続けています。単純化していえば、この思想は一切の存在を究極の一者からの流出であると考えます。つまり、我も物も神の属性の現れであり、物我の区別は虚妄に過ぎないとされます。もし仮に、仏性と神が同じものだとすることが受け入れられるならば、イスラームの神秘主義思想と禅に代表される仏教思想との間には、何らかの対話が成立するかも知れません。しかしまた同時に、現代のイスラーム「原理主義者」たちは、この神秘主義をこそ当面の敵にして戦っているのだということも考慮に入れなければなりません。いずれにせよ、「神にせよ、仏にせよ、要は同じなのだから喧嘩は止めなさい」といって、留め男が介入できるほど事柄は簡単ではありません。

イラクでは依然として、米英の兵士が攻撃される事態が続いています。サッダムの残党の仕業とされているようですが、イスラーム法が、異教徒の占領下におかれた信者に対し「聖戦」を義務づけていることも事実です。すべてのイラク人がこの義務を遵守しようとしているとは到底考えられませんが、しかし、この義務を自らに課す覚悟を定めた人々がいるようであろうこともまた想像に難くありません。口先だけの留め男には身の危険はありませんが、相手から自分がどう見られているかを全く理解しないまま、ひょっとして「聖戦」の標的の位置に身を置くことになるかもしれぬ人々をこの国が送り出すことを強く憂えずにはおれません。（7月16日記）

骨董品はどんな味？

9回生　古美術商　日高　健一

「いただきます！」と言って、私はピーナツぐらいの大きさの黒い貝をつまんだ。日高先生！噛んだらダメ、中の身を吸い出して食べます、と建築家のTさんが教えてくれた。チュウ！と吸うと、貝殻の中からヌルリと身が出てきた。甘酸っぱい香りが口の中に広がる。何という美味しさ！この美味しさを表現する言葉が見つからない。似たような食べ物を探すと、殻付きの生カキをツルッとすすったときの美味しさと、中国料理の酔蝦‐紹興酒につけた海老の踊り喰いをミックスした味。それをもう少しデリケートにした味といえる。

生カキや酔蝦を食べたことのある方は、その美味しさの想像はつくが、食べたことのない人には、まったく想像することすらできない。メニューには“泥貝”とだけ記されていて、調理方法などは書かれていない。上海料理の前菜の一種で、生きている泥貝を、その店独特のタレに漬け込んだものである。ヘドロのような黒っぽいピーナツ大の貝を二十から三十粒、小皿に盛られているだけ。食欲を起こす人はまずいない。つまり、食べてみなければ、その味は想像することはできない美味しさなのだ。これは、なにも泥貝に限ったことではなく、どんな食べ物でも料理でも、いくら産地に詳しくても、料理法に精通していても、食べたことのない人には、その味を語る資格はない。自分の口に放り込み、舌で味わって、食べてこそ、その美味しさ、まずさが解るのである。

同じように「この魚藻文のお皿をいただきます」と言って、私は骨董品を買う。「いただきます」が買いますの意味になる。自分の身銭を切って買うことは、食べることと同じで、いただいてこそ、その物の良さやまずさが、本当に理解できるのではないだろうか。

いくら染付（青花）の材料であるコバルトの産地に詳しくとも、瓷土であるカオリンの配合についての知識があっても、博物館のケース越しに染付（青花）を見ているだけでは、青花（中国では染付のことを青花といっているので、以下は青花に統一する）の味は解らないものである。まして、美術書の写真を見て、いくら青花の研究をしても、青花の味は、解ることは難しい、というのが私の考えである。書物で研究することも意義のあることで、楽しいことも多いかもしれないが、青花を味わうには、やはり自分のものにしなければ、味わうことはできないというのが、私の持論である。だから、同じ“いただく”という言葉が使っている。

食べます、や買いますと違って、「いただきます」は単なる丁寧語ではなく、感謝の気持ちが込められた言葉と思えるのである。食べ物でも、骨董品でも、それを作った自然の大きな力や人の技術に感謝し、さらに、そのものとの出会いに感謝する‐日本語ならではの味のある言葉であると、常々、私は思っている。

骨董品といわれるものは、何百年も何代にも渡って人の手を経てきたものである。美しいと感じさせるからこそ、人の心に何かを残すからこそ、今に残っているといって差し支えない。眺めているだけでは、その味がなかなか解らない。伝わってこないのである。自分のものにして、一晩中、飽かずに眺め、さわったりさすっていると、だんだんと、今までの所有者の気持ちが伝わってきて、美味しさが味わえるのではないだろうか。

私の場合、中国の文革後、いち早く中国を訪れる機会に恵まれた。そして年に五、六回も、北京、上海、天津を訪れるようになった。行く度に珍しい中国料理に舌鼓を打つように、この20年間骨董品も次々と口にした。友人や知人だけでなく、骨董商に、これは美味しいよ！といわれれば、どんな骨董品であれ、自分のお金を払って、口に入れて味わった。素晴らしい美味しさに出会ったこともたびたびあったが、これはまずい、と感じたことも数多く経験した。

中国骨董は高い。中国骨董は鑑定が難しい。ニセ物が多く、騙されることが多い…、など、骨董ファンでも敬遠される方が多い。食べず嫌いの方も多い。しかし、中国骨董こそ、その歴史を見ても、残されている量を見ても、コレクターやファンの数を見ても、骨董界の王様。最も味わい深い骨董品である。しかも、この骨董品の本場が隣の国。二時間で宝庫に行ける。欧米の人達に比べて手軽に食べられる立場にある。何という幸せなことであろうか。「いただきます」といって、その出会いに感謝し、これからもどしどし食べていただきたい…。

東京支部便り

1，第二回同窓会および10月度木曜会

日時：2003年10月23日（木）15時－17時　　場所：神戸大学。東京凌霜クラブ・東京KUC

特別ゲスト：岩崎信彦文学部長

引き続き、東京凌霜・KUC主催木曜会　講演　岩崎信彦先生

2，その他の行事　（東京凌霜・KUC主催の会合）

1）各学部の代表による「学友会」には、小野会長、中野幹事が出席（2ヶ月に一度）

2）1月の新年互礼会、5月の凌霜・KUC支部総会、8月のビアーパーティ、12月の忘年会、毎月第3火曜日の昼の「特別火曜会」、毎月の他の火曜日の「火曜会」（昼食懇談会）、毎月木曜日の「木曜会」（今年は各学部長の講演会）を年中行事として、文学部の有志の方々が参加。

3）本年11月には、佐々木知子様（参議院議員、神大卒）の「ピアノ演奏とトークの夕べ」を開催予定。

3，東京支部の役員

支部会長：小野幸次（5回生）　幹事：河野房子（8回生）、中野裕（9回生）

4，東京支部の連絡先

〒223－0064　横浜市港北区下田町1－1－1－113

電話・FAX：045－561－6317　E－mail：y.nakano@d9.dion.ne.jp　中野　裕

5，上記の各種案内の希望者：

E－mailおよびファックスにて案内を送ることにしていますので、新規に送付ご希望の方は、上記　中野までご連絡ください。また、下記東京凌霜・KUCのホームページもあわせご参照ください。

URL：http://home.kobe-u.com/tokyo/

「ある妻の決断」

16回生　池上　淑子

先日男性同士のカップルが“夫婦”として（無論法的にではない）紹介されているのをテレビで見た。アメリカでは既に、こうした“夫婦”を法的に公認し市民権を与えている州も2、3あると聞く。日本でも実態に即した形態を“夫婦”として、市民権が与えられ、承認されるのもそう遠いことではないのかもしれない。こんな変則的な例は別としても、社会的価値観の多様化に伴った夫婦の変容は顕著で、国、自治体がこぞって「男女共同参画家族」を推進するなか、女性も、“妻、母”の座に加えて“個”の意識が強くなったことには驚かされる。

私は調停委員として16年、折り返し点を少し過ぎたところである。家裁で扱う事件では、ここ数年離婚に対する罪悪感も薄れ、若い人達は勿論のこと熟年夫婦も離婚を躊躇しないケースが増えている。

先日も熟年夫婦の離婚が成立した。婚姻期間30年、子供達が独立結婚し夫が定年退職直後夫婦でまさに老後の生活開始という時に妻からの離婚申立である。当然退職金の半分の権利をも主張して。積もり積もった不満があったとはいえ、50代半ばの無職の妻が決断するのは相当な覚悟が要ったに違いない。「同じ空気を吸いたくないのです」の言葉に相方の男性委員はいささか呆れ顔、夫に同情して元の鞘に納まることを縷々説得した。私は同性として思いは理解出来たが、これからの生活の心配が先立った。定年まで我慢したという妻、お金よりも自分らしく生きる方が大切だという妻に、確実に時代は変わったという思いとやはり女はしたたかだと妙に心強く感心した。「女は怖いわ！せいぜい嫁さんのご機嫌取りしなければ」という男性委員の声には実感がこもっていた。

当然ながら私も、夫との間にギャップを感じることも多々ある。この日はこの妻の勇気をちょっぴり羨ましく思いながらの帰宅となった。

会計　9回生　**花木　直彦**

会計を担当して最初に思った事は、卒業時に同窓会費を払ったのかな。卒業して四十数年経った今、残念ながら何も覚えていない。多分払ってても、千円程度かな。

今の卒業生は、入学時に三万円の同窓会費を収めている。同窓会の会計をみると、収入の大半はこの会費。今後、会として様々な事業を進めて行くと、毎年百万円以上の赤字が見込まれる。

新役員として、収入を如何に増やすかが最大の課題であろう。同窓会費をあまり払った記憶のない同窓生の方々に、様々な機会にご援助をお願いする必要があるのではと思っている。

ところで、二十年前家業を継ぐため教師を辞職した私、その頃にたまたま神大経済学部大学院に通うタイ人の留学生と懇意になり、仲間らとタイ語を習い始めた。それ以来、仲間の輪が広がり「タイ語を楽しむ会」を結成し、今は会の代表にまつり上げられ、日タイ親善の一翼を担っている。タイ語の先生は、常に神戸大学のタイ人留学生にお願いし、謝礼は奨学金としてお渡ししている。学習は月に二回程度、終了後は居酒屋で先生を交えての懇親会。多分これがこの会の長く続く要因ではなかろうか。

過去、八名の留学生が帰国したが、大学・政府・銀行等で活躍している姿を見るにつけ嬉しく、時には彼らの結婚式に参列したり、時には彼らの家族と一緒に旅行したりと大歓迎を受け、本当にお世話してよかったなあと思っている。最近の私のタイ語は、進歩どころか、後退し始めている。多分年齢のせいだろう。

しかし、同窓会の会計に関しては、しっかりと執行致しますので、どうかよろしくお願いします。

同窓会への協力金の御礼とお願い

昨年7月会報発行発送と共に、皆様方に協力金をお願い申し上げたところ、現在までに332名の方々より125万円余りの協力金をいただきました。ありがとうございました。ここに、紙上をもって御礼申し上げます。

なお、前回お忘れの方々には、今回ぜひとも1口3,000円（何口でも可）の協力金を、同封の振込用紙にてお願い申し上げます。

文学部同窓会臨時総会

日時：平成15年11月29日（土）11:00～　総会
13:00～　懇親会
場所：神戸大学瀧川記念学術交流会館
会費：5,000円（当日徴収）
内容：同窓会会則案の検討　他
特別講演：出水 康生 氏（本名　泉 康弘・10回生・作家）
演　　題：Boys, be ambitious like this old！
ー戦国天下人 三好長慶と信長 秀吉 家康ー

K,U,C,（神戸大学クラブ）入会のご案内

K,U,C,は学部や世代を越えて卒業生がふれあう場です。会員相互の親睦を深めるために、2ヶ月に1回、講師に神大の先生を迎えての講演会を開催。終了後は講師を囲んでの懇親会です。例会の他にゴルフ・囲碁・旅行などの同好会も活発に行っています。ＪＲ元町駅近くの本館牡丹園に事務所があり、例会もここで開催されます。ＴＥＬ・ＦＡＸ（078）334－1323へお問い合わせください。パンフレットをお送りします。

編集後記

文学部同窓会幹事が24年ぶりに交替し少しだけ若返りました。これを期に同窓会報も形を変え「文の窓」として発刊します。通刊では第10号ですが敢えて創刊号としました。今後は年に１回発行するつもりです。体裁も新聞型でなく冊子型。創刊号は急遽決まったため８頁ですが２号以降は16頁を考えています。

国立大学の法人化など学校情報、恩師の近況、優秀学生論文紹介、各部各期よりの同窓会便りは勿論、各人の著作刊行物の紹介、自作の絵画、焼き物、写真など自慢の作品、あるいは所有する「私のタカラモノ」などをカラフルに紹介する頁なども企画しています。

また東京支部とも連絡を密にし情報の交換、人の交流なども具体的に進めて行くつもりです。同窓会会員の積極的なご協力を心より願いまた期待しています。（鞍井・中西）

題字：文学部教授　福長　進先生にご依頼しました。